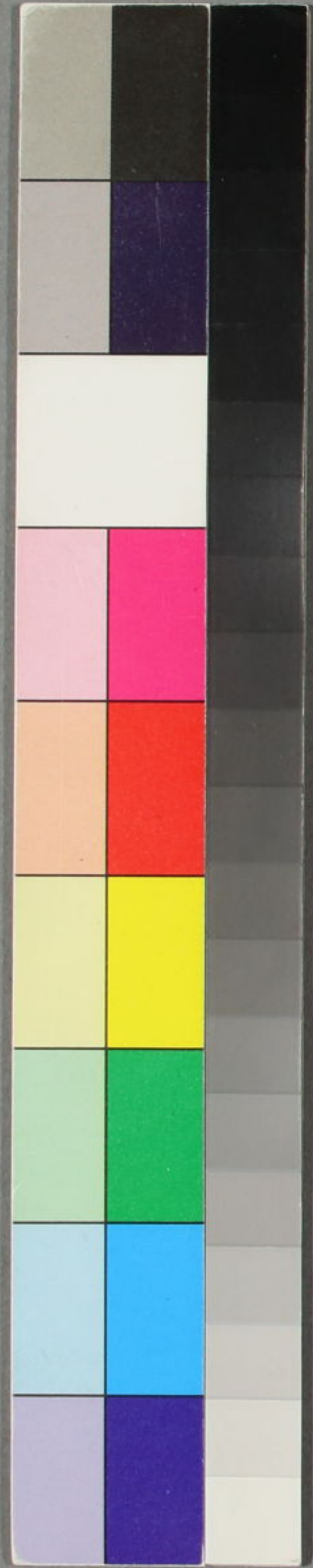


風俗文選大註解  
貳之上

5  
5639  
3





門 〇〇  
號 5639  
卷 3

冊 五  
號 五  
函 上

風俗文選大註解卷之貳

江都 佐保姓 葺日分我著  
南都賦 汶卯

文選陸士衡文賦

賦ハ體物而瀏亮 賦ハ以陳事故 曰體物

元明天皇代和銅三年より桓武天皇延暦三年迄七十余年  
白王京の地あり

書紀崇神卷 埴安彦妻音田姫と反逆していくさ起し忽ち

至る各道をつまら山脊より坂は大坂より共に入て帝京を襲  
んとす又大彦と和珥乃臣の遠祖彦彦菅とを山よりつら

埴安彦を討しむるは忘念を和珥乃とけすき坂の上よりいひす  
て則奈良山よりつて軍とちひな軍いとみて草木をあらりき其

青丹より奈良の都よりさふらひ三笠の山乃榛る元明天皇和銅

卷二上





二年後京乃宮よりけ京に移さる。大宮殿 大佛殿 佛神をあらわす。王法を輔く宮乃社月日の宮竈殿 鏡乃神ハたちらるる度徳を。あり浮雲の宮々々麻立のけりめとけ

青丹よりハ奈良の冠詞なり 青丹ハ土なり 壇 赤土 青土

内さあひいれ盆とせま塔の木の下のあひるのうらまはるる

宗雅抄ハ侍也笠集りせよま塔の木の下のあひるのうらまはるる

文武天皇母元明天皇始て奈良の都を建ぬふ同三年遷都あり

左京ハ今乃南都右京ハ西京をいふ後京の宮 市郡 鷺栖坂の

水あり 春日大宮四社才一武麿植命才二經津主命

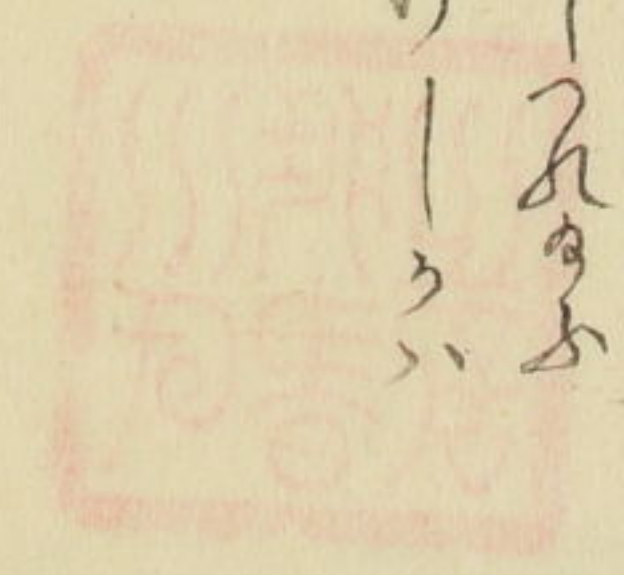
才三天兒屋根命 才四姫大神けりハ陸奥ハ地竈の浦ハ天

照りの常陸ハ麻崎ハ影向ハ神護景雲元年六月廿一日

麻崎をせさせ同年十一月七日ニもふの山中ハつらせぬふ

供奉の随者ハ時風秀行乃あ人も舎人ハ乙卯丸をりつれぬふ

長時時風秀行供内を奉るにやうあり 栗をささけり



神感より 植栗の姓をのふ時風秀行乃末系中臣の姓の下に 植栗氏をあらりし始て時風の末ハ神宮の禊り秀行の末ハ遠宮の終り乙卯丸の末ハ祢宜の祖梅木氏也

朝野群載曰大佛殿高十五丈六尺東西二十九丈南北十七丈基 砌

高ハ七尺東西三十二丈七尺南北二十丈六尺内陳柱九十六本天坪

三千百廿蓋廻廊柱五百八十本東西八十五間南北百間是殿初

天平年中造建夫間也本尊盧舍那佛坐像長五丈三尺五寸

若宮ハ天兒屋根命の末子天押雲命を奉るハ鏡堂ハ長保三年

三月三日なり鏡の神は射薬師の南ハあり尾上宮ハ高峯山ハあり

倭姫記曰尾上宮乃迹ハ古市の上の丘ハあり尾上の離宮といふ

浮雲宮ハ延宝記曰ハ神麻崎よりかせきよきてハ影向ありなり

旅のけりハ麻立とけりけりなり内陳ハ内立杖あり

神あの小けりさきさきやきの橋といふ板橋をさき雲のけりといふ關

迦井ハ弘法大師をせぬふ井なり庭ハ大ぬ神のめりける麻の

ありありある石あり



奈良の帝は宇奈布大津渡御ふひとの御孫式部御宇合の御子とて  
その後、少將兼太宰の御孫系、廣徳天平十二年肥後、松浦  
郡にてむろんを起し、一万人の逐徒をおかからし、帝をかくし奉らんと  
ありし、花浴のさき、さきのめ、大野東人を大將軍として、軍  
二万余騎をさし、集り、度つるをちう、いつのふ、則ひ、つ、誅  
よ、依、其、靈、と、り、を、さ、し、れ、ハ、神、は、い、ま、ひ、ふ、ふ、と、か、や

氷室率川東大寺乃八幡二月堂又為狭井、三月堂四月堂、鈎鐘  
は、久、我、入、道、の、詩、を、と、り、め、大、門、の、折、釘、を、源、頼、朝、の、幕、を、張、貞、福、寺、々  
七堂伽藍、始ハ山階寺といひ、中ころ、はる、屋、寺、と、い、ふ

西行撰集抄 率川の社々、春日の御やろ、は、は、く、に、引、の、け、て、い、さ  
う、は、と、中、けん、そ、く、の、神、お、は、い、ま、い

率川ハ元化天皇宮造の地より、伊弉河宮と申奉。率川ハ坐以  
大神の御子の神社、率川阿波ノ神社、率川々春日山より出て、さ  
込の南を流れて、守野の南の方を流れて、小川也  
神祇今、孟夏、三枝祭、義解、率川ノ社ノ祭也、以、三枝ノ花

飾酒罇カトル祭ル故曰三枝ハはさつハさ百合の花ハさつハさ百合ハとの  
名佐カ幸イ新井氏曰百合を由理と云ハ、韓地の方言なり  
東大寺一名萃サ嚴寺又云分カと云、二月堂、狭井、毎年二  
月十二日の扱、後必、遠、夜、の、神、お、の、み、く、し、川、の、流、を、音  
り、ゆ、き、音、り、川、と、い、ふ、二、月、の、水、取、と、い、ふ、云

水取ハこりハの、傍ハの、音ハ、音ハ  
三月堂ハ法花堂、四月堂ハ三昧堂、五月鈎鐘ハ天平四年始、  
鑄、高ハ一丈三尺、口ハの、り、九尺一寸、三、歩、厚ハ八寸、寛文記曰  
奈良の講、日、勢、ハ、東大寺、戒、ハ、平等院、声、ハ、三井寺

青丹ハよハ、奈良の都ハを、さ、く、花ハの、白ハふ、り、如ク、今、さ、つ、ら、り、  
ま、の、の、め、ぬ、き、の、ち、り、を、さ、け、は、さ、く、奈良の都ハを、祓ハ、誰カも、そ  
東金堂、中金堂、食堂、講堂、南圓堂ハ、補陀堂ハ、を、さ、つ、て、願、礼  
の、札、を、納、り、東、者、堂ハ、い、り、の、八、重、檜、を、跡、ハ、花、壇、の、庄、を、領、  
東金堂ハ神龜元年七月元正帝御、胎の御、御、安、穩、の、御、祈、り、  
に、聖、武、帝、御、建、立、本、尊、藥、師、佛、中、金、堂、々、本、尊、丈、六、の



釈迦眉弓の玉々震旦必より後せり玉中は世尊の影くつり何方  
 よりぬてても西あるより西向石背の玉とつみ西金堂ハ天平六年  
 正月光明皇后の御母橋子の氏の御為に建り水鏡子のせり  
 大講堂ハ本尊弥勒三尊也南金堂ハ羅素觀音を安置す三目八  
 臂ありてたりの肩は麻の皮をかけたゆふ丈六の尊像之是春日大明神麻  
 を巻くゆふゆふんと西へ傾れり九番あり  
 花垣の庄ハ御石集ハ八重橋ハ東金堂のありありあるひらひら  
 室のころ遊ばばハ八重橋あり今ハ八重橋一棟ありれも在るもあ  
 りぬと云ん詞花集ハ伊勢を悼

いぬへ乃奈良の都の八重橋り九重ハ白ひぬる  
 一系院の御時奈良の都の八重橋を人の奉りるを此あり侍りれ其  
 花をなつて歌よめと侍りれハよめる新古今集よめ人あはれ  
 ちつとおもひるこそそ花橋かふるゆきよあふせりなり  
 御石集ハ上東門院とて后おつたゆきハ八重橋を都にめされハ大  
 いとひんやたと今々ともあれさくをほりてはこそまのひん

トといひてあるらるる紫ともありとや女院かときてめめひて  
 奈良法作々心もさうのこそおもひは律も色源として橋はめさ  
 ちつり越ハ伊賀ハ余ゆ庄をよせむひて花の盛七日の君おを  
 てさせりかみぬハ余ゆ庄を改めて花垣の庄とハ名つけり

け里々々お花守のよ孫りや  
 又春日の美宮の神ゆ 祐茂とつみ人あはるハ八重橋をつきと先  
 かのうせざいそ橋る色をるて色も討は侍りれハとめてさ  
 りのよそあひるける大内よきこめ一上られて其橋をめさ  
 けり奉りま

八重橋り九重よりきれてなき都の事ささひは  
 とらんよみて花をむすひる大内よけをめてさせひて橋ハ  
 奈良ハそかへりゆの祐茂ハ優よやさきんとして撰集のありに  
 和歌の浦に流つけり流る人よあはれぬ音をのそそく  
 とよみてまひ入る是より流るの神ゆとつひ



西金堂の樂をあつたため南大門にうつて薪乃能を始む七宮の使は  
四坐の猿樂をめぐり雨天は紙を踏んで試み夜陰より薪を積んで焚く任  
生、針の本は多くの号をとり大倉の芭蕉は達人の名をあらう水燈は  
能ふ宮の能春日祭ゆゑ素結は大氣の頭をつつみて大華表よりつら  
なり錦を着て柵の下より弓矢の立合をなす頭登り兒々シヤウキ休本は腰をかけ  
赤衣の仕丁は棒を横ふ大馬大倉鎗大太刀持小太刀持ケイハ流鏝ハツカサる  
長谷川堂々甲曹を帯り射の呪いマヤ鏡笠は弓矢を持閨白代々束  
帯して夏の花をかざりバヤヨ兒々供つれて腰は本履をつらハイケンの神  
子奈良の神子細男氷室舟の樂人トカニ拍子ハ仕丁乃宿老頭登のハ帶田  
樂のビゴロ春々二月の雪をちりちり霜月の花をさくら

南大門々金剛力士の二王の像をみる土人汗浮つとよふ夏石は汗浮  
をり射り薪の能々四坐の友夫毎年二月十日より勅で十四日は終  
るも四坐の役者の昔を尋るに共説まらるる中に聖徳太子は下奉の川勝  
に命じて十六番北面をつらせ紫宸殿のおりて舞をそ侍りまらるる  
其舞神樂のにはらなれはて神の字をふて申樂と名づけしと云

例式ハ弘仁十二年東金堂ハ八相の花西金堂ハ二相の花六十種の花を  
かぎり擁護の靈神レイシ持實の諸神を勧請して供養せしむは法會の旨  
ハ益救をふるは薪を焚と云は時唐の人来て西金堂の場を舞かまて  
りるとそ其後清和天皇貞觀六年のころより純く貞觀十二年魔  
風吹おこり雷まき落空かきさうりなれハ大氣おとろきせんまらほて  
是おろこの神の法會をなする君めるそ侍りなると満坐一回して終るを起  
西金堂の法會を南大門よりつて行くとつて人の舞かまてり日  
倒なれとて能をそへめり是薪の能はけめり法會は陰るれハ幸  
信春宮は壇のつてつあはれてたきを焚共先まつきて御優をなり長  
杖のあはれとけ芝生は紙を敷てのふるふを敷めり紙を敷めり  
何れけむらうけ何れ宮も能あり四坐ハ觀世 今春 保生  
大倉 又奈良坐ともつ

素結は太鼓の頭をつむ 唐土揚別の里より寺のかんき和尚日  
本は海へて佛法を弘めんとめり時共つ牙ホとめりて袈裟を  
頭をつつみ顔をかきして和尚をとりめりされと和尚日城佛法



春日祭縮圖

大太刀持  
小太刀持

野右刀十振長サニる余  
小太刀 五十腰

大名馬 百三十三疋

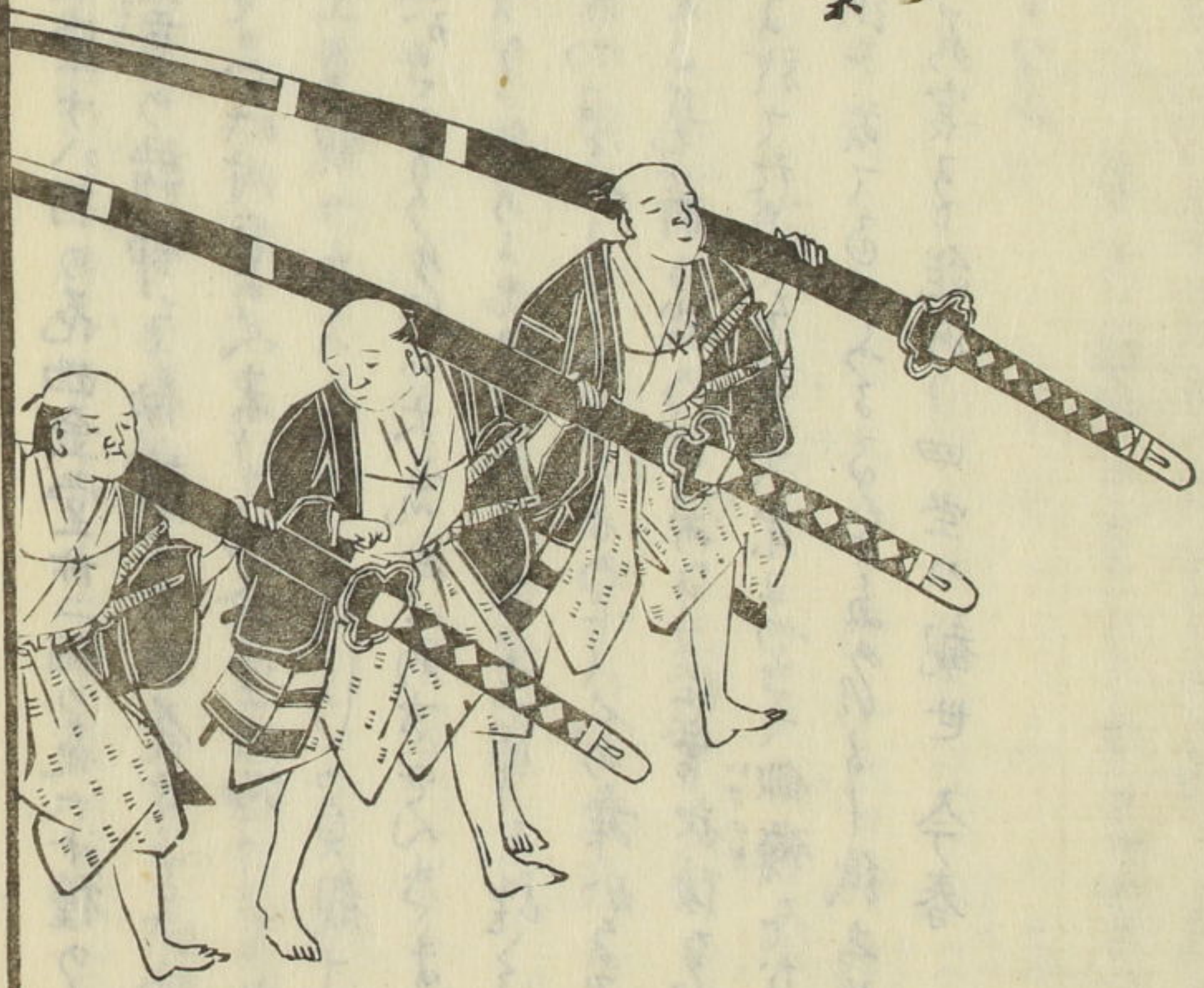
大和大名長外よりゆ

馬帽子素襖

大名鎧 百三十本

射弓の兜

此旅あそび流鏝馬の  
櫓の組笠座の度乃



むらさきをける

文中ハ平ヨの兜と

あゝハ馬長の兜と

馬長兜 五騎

兜ひで笠子山名尾をさ

五色の細き袷衣五筋付る

の袴

大童子一人白浪金の海

又三人ノ竜をい

一ツ物といふ短冊又

あはかき付あり

顔をの兜テ

細男六騎 凱向ね

くろくハみ官



鳥鷲寫















ついで帝元ちりしめさるるをてつてあつて人羨しけれなきこめし  
るりていさうあつれうりひて池のほとりはおゆ人ゆきかいて人くよ  
るよよせゆふ 梓りてんね

わきのふく移りてれ髪をさる波の池の玉葉とるもをかみお  
とよめる附内門

さる波の池もつりよりさるまふく玉葉かつく水そひまぢ  
とよめるひつり地は墓せせぬひてなんぬせおひまぢとまん

名目や池をめぐりて おもすく ぬ

白氏文集東林寺白蓮詩

夜 深<sup>フカ</sup>テ 衆<sup>イソ</sup>僧<sup>ソウ</sup> 獨<sup>ヒトリ</sup>起<sup>オキ</sup>テ 繞<sup>マウ</sup>テ 池<sup>イ</sup>テ 行<sup>ユク</sup>

廣<sup>ヒロシ</sup>沃<sup>ワク</sup>の月<sup>ツキ</sup>尺<sup>シツ</sup>今<sup>イマ</sup>の世<sup>セ</sup>の<sup>ノ</sup>せ<sup>の</sup>の<sup>の</sup>せ<sup>の</sup>の<sup>の</sup>て<sup>て</sup>遊<sup>ユ</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>人<sup>ヒト</sup>多<sup>タ</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>附<sup>ツケ</sup>沃<sup>ワク</sup>  
よ<sup>よ</sup>き<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>月<sup>ツキ</sup>か<sup>か</sup>け<sup>け</sup>水<sup>ミヅ</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>つ<sup>つ</sup>ひ<sup>ひ</sup>人<sup>ヒト</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>り<sup>り</sup>は<sup>は</sup>宗<sup>ソウ</sup>祇<sup>キ</sup>も<sup>も</sup>月<sup>ツキ</sup>尺<sup>シツ</sup>を<sup>を</sup>せ<sup>せ</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>る<sup>る</sup>  
水<sup>ミヅ</sup>の上<sup>ノ</sup>へ<sup>へ</sup>杖<sup>ツエ</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>け<sup>け</sup>て<sup>て</sup>浮<sup>ウ</sup>草<sup>ソウ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>近<sup>チカ</sup>き<sup>き</sup> 附<sup>ツケ</sup>月<sup>ツキ</sup>水<sup>ミヅ</sup>は<sup>は</sup>う<sup>う</sup>つ<sup>つ</sup>り<sup>り</sup>れ<sup>れ</sup>は<sup>は</sup>

うき草をかきかたれハ水の月もあつて池もあつて  
とよめゆくゆくひひるをたきまて池のよまて又一番のこをさる

けいこの心ちきりおそくハ定家宗隆も親連も連二も  
とよめゆれハ宗祇の懐心をかおゆめりハ其のの兒の言を  
かこめゆけならしう童ひりて我らも歌よまてせんそよみなる

親連連ハ定家宗隆もあつてせはるハあつて牛のくそい

衣かけ柳良辨夜泣の地蔵文使の地蔵元貞ちの鐘々鬼の子の痕はな  
れ十三鐘々七つと六つの石をつく角ち純も般もあつてハ大塔のあをか  
ら何の坊ハ義経の鐘をこむ

衣かけ柳も同前ハあり宗女のあつて附衣を柳はかけしを本す  
ては括て括人うあつて也良弁村々良弁僧正幼童の附位ゆる共  
跡は杉生立ちより俗良弁村とつみ

文つらしの地蔵ハたの舟行障の女もまうりのちけ地蔵をいひて  
冥土へもまもりたれハ其返りをとてあつてし

元貞寺乃鐘 本朝文釋

道場法仲ハ尾張ハ阿音郡の人なり姓名をまて及相傳てハ敏達天皇  
の比附尾張ハ農父ハ五月田ハ水と入り附天うり雷鳴及ま雨を











あまのこころしつひに時不鳥よ多蛇の玉草よんくつり大よめんゆ  
 大佛ぬまはあまの玉草一朝のくつりの中よ焦ちるるる  
 彼余坊重源上人姓々紀氏境に在る元季重の二男刑部左衛門尉也  
 て仁安二年宋玉より阿波漢を御し明州より舍利の瑞光を見え  
 年をなると後朝一思谷の源空上人のききとるる其後東大寺再建  
 の勧進一かかるとり  
 周防国の玉府の皇よ首大佛を造るの御彼余坊重源玉良杖をも  
 とり阿の源空の火をよるといひのりう九に有るるる今もある也  
 阿阿院松院公慶ら歳廿五に備はりて大佛を起し大佛を再建  
 大勧進として皇享の比よりして大佛ぬまの御しつり傳記界の  
 仔細の他 仔細にいせ物語の他者寛平法皇より御しつりて  
 信成親王をせりし御しつりし源氏物語大和ものかかるといひせ  
 のゆくとつ女ゆとつ心なると  
 仔細ものかかるといひむか 男くぬとつりてを良の京春のの  
 里よあるるるを御しつりてかきせるといひかかると南都の懸よと  
 り

紹巴 松村氏 号 宝珠庵 臨江齋 奈良生

はめ周桂門人後里村昌休門人昌休早世昌叱幼年して紹巴  
 後見より依て里村氏に改慶長七年没

紹巴法眼奈良の京春日の里よむまれをちよ近きころけ京より周  
 桂法作とて連歌よ長せる人下向ありに道よおひ心つきりりい  
 作よ近き十九年おひよりてかかると名を紹巴とつりしりよ一  
 とを平あてをき別と名めると昌昌休門才と成て益ら日のつきおの  
 つき心かけられ一とて山よけ山よさつはの道よめつり  
 阿予よち法は十四支の三を霜月はめの五よさぬ別よあつきなりり  
 を法眼めるとかかると山よさつ海よりも深とつりき年月  
 をよをわてかかるといひつりよひつりよひつりよひつりよひつり  
 よう風よあまのれつりよなるるをこりさぬなりみさいつりりよあ  
 一くあつりませりよませりよあつりよあつりよあつりよあつり  
 年よ九あつりよ九月十二日あるる泉よあひつりよあつりよあつり  
 ちよひつりよ道よあつりよあつりよあつりよあつりよあつりよあつり



を二なげせよかきりしとやいさむるとやうに泪もよほしうそなり  
しうおろろるるは百のおとひをのく侍るものなり

ふとさひかたもやまきくもるころも 昌也

むかおもふ松の月よかくふきさす

くれ糸の露や新編はけり

るくーの声かのめり 山近也

こけ入るゝまくろ下道

華原磬泗濱石蘭奢待の伽羅鴨の毛乃屏風柳生家の劔術室瓦院  
乃十文字法花寺乃作り大西大寺の豊心丹法詠味噌力 鐘頭  
奈良漬奈良酒奈良金剛奈良糸麻 墨 世に名をくろくち  
箱中絶つば糸より起る岩井の具足文珠の物 膠 緑青 鞞 鞞乃皮

土風呂 屏風 檼本練

白氏文集

華原磬華原磬古人不聽今人聽 泗濱石 泗濱石今  
人不擊古人不擊今人古何不同用之捨之由 樂工

故老曰泗濱石下調之不能和 得華原磬考之乃  
和由是不改

系者待々聖武帝の時異ひより後り名も也將軍家天下草創  
の時也、を少く伐ぬふ倒なり足利尊氏公一寸伐ぬふ織田信長公  
ハ一寸八分伐ぬふ慶長七年六月是を伐ぬふは香切也と又もと  
の如く成てさす 城せはとや

鴨の毛の屏風八東大寺供養の時唐土よりつり 大屏風也當寺より法花  
寺其百十五回光明皇后系詣の時左右は是を引つけしなり

柳生の劔術ハ元和年中菅原の宗親より劔術を練行ぬは、糸を  
起し糸を領地しぬふ柳生村とす

法花寺の作り大々法花寺村あり律宗より尼の玉をちとて往在法







て遠く梅の京の昔乃自ひをおこし紀貫之の梅の芽をまきひて  
く詩歌連傳の句をよむとめものしる夫の中より伊勢の梅乃梅  
の詠多の句をよみてつよの

朝オシ皮ハ皮草草の三あめ皮ハ毛を去るをいふも皮ハ草ハ毛を去  
て皮の層シのるめつるをいふも皮ハ毛を去るをいふも皮ハ草ハ毛を去  
皮のるめつるをいふも皮ハ毛を去るをいふも皮ハ草ハ毛を去  
いふも皮ハ毛を去るをいふも皮ハ草ハ毛を去るをいふも皮ハ草ハ毛を去

本練もいふて極柳のつよ 湖春

奈良茶をヤキウと名つけ益食を硯水といふ油煙取五合杯宜カクイを  
の石榑多村の木格子赤きりのハ頭登の赤飯よるといふ疲る人ハ金堂の  
鉦シホといふ木辻の待宵鳴川の別情ハ万金をつとめおまひハ一人下を  
恨んすハ七景ハ八景町ハ門ミカドの表みて五景三景の巻をよつる  
その朝起春秋のたつとひ諸山よすえ諸人よこころは是皆旧都のありつこ  
き遺風なるべし

奈良茶 ともて茂森の常語に奈良茶三石の味をよむと飯席よ  
なまやましハ奈良茶三石とハ今我を物より質素なるをいふる  
奈良茶といふハ今の茶粥のり也むハ南都大佛殿建立乃  
伊迄玉の氏皆く力をつとめ又ま食を茶粥して其余のあり  
しるを寄進しとありたるとハ三石の粥ハ飯十石の目をもち  
といふ心あり世俗けんやのるを奈良茶三石といふなり  
ヤキウハ茶粥チャウとして茶粥と同硯水ケンスイハ

お梅の白才ハ 切燈臺のかけの中飲 正章  
建水ケンスイのやうなるものを引そハ食 長頭丸 政信

奈良のまは 於夕ハ茶粥をくハ益ハ飯をくハ是をケンスイといふ  
とあり人いふハ今我日奈良の寺ハ往古ハ厨クより外より飯を炊て僧徒  
一人別ハ厨クあはしなり於夕茶粥の遺風其趣あり  
乞巧坂ハ子坊坂といふ段ハ寺町の南ハ往還ハ石ハ往來の人其に  
腰をかくる財ハ其徒ハ入とも南都傾城町ハ木辻鳴川といひて壁横



にあつて七の八景なりハ奈良表所記よりまゝ果は  
真福寺に毎月晦日講といふ事あり小僧共心願の實をくらふむ  
はめよまふあつて雜戲をまひあつて口をせうめんとて小僧  
と一節ふ時を衣を剥て罪はとあり

氏神ハ春日大御神源氏ハ八幡宮其神の苗裔にあつて人  
氏神といふこと今住所の鏡を氏神といふ其由を考へ  
元暦元年二月七日平のちけひ源氏の爲に唐らる五年以前大佛  
殿をやく傍を以て南都の小路を引返す時源空上人は講せ  
るを源空往て戒をさつて松かけの硯と鏡とを布施とのち  
大佛を造る時彼鏡をが中になげしむ死して鏡化はつたや  
正西のほうらよお射てあそ人もちて奇異といふ是も松永の兵火  
よかしく焼失し

冬に於て奈良のむかひに新築の  
菊のまじり奈良のむかひに佛達  
奈良よそ人の別を討

二侯より別を考へり 麻乃角  
本込にとすう

門立の被くハや 小麻 うさ 其角  
番の火をたすうめり 麻の形 探志

奈良の方僧供養に詣て山をうりよ一おをゆ  
りてぬてまよき(き)料足もなれハ松元の  
かかみよあつたよまはつてのうれ心傳り

み、おや本信もなまてこまけり 唯然  
奈良をゆき

葉のむかひ中に城あり 郡山 許六  
大和のや新々奈良茶を花盛  
むかひめく奈良の伝説や 菊 花  
祈り味香をくらぬ奈良茶の空一のふ  
八重橋 奈良のつる奈良茶の柳 法圃  
菊のまじり奈良のつる代の男あり 蘇



菊よめて奈良と難波ハ音日振  
と風や人声うつ三笠山  
今つ日秋乃夜結を春の山  
傘乃薪の能乃ありとほし  
後の月寺ハ奈良茶のけりめし  
南都殺あまを  
去来

鎌倉賦 兼序

許六

夫相模<sup>かまくら</sup>郡の者<sup>なり</sup>て大職冠<sup>ダイシヨクン</sup>鎌子丸の時靈<sup>トキレイ</sup>をよつて鎌を  
埋むの地也<sup>なり</sup>故<sup>ゆゑ</sup>に郡の名<sup>な</sup>と<sup>して</sup>深谷の時忠惣退補使<sup>トモサダ</sup>として文武の御  
宇より聖武の神龜<sup>カメ</sup>年中<sup>ナカトシ</sup>近<sup>ちか</sup>く<sup>なり</sup>居<sup>ゐ</sup>り<sup>ま</sup>す<sup>上</sup>總介平直方<sup>トシタカ</sup>是<sup>こゝ</sup>に<sup>住</sup>ま  
す<sup>八</sup>幡<sup>ハチマタ</sup>太郎義家<sup>ヨシカ</sup>朝<sup>アサ</sup>に<sup>より</sup>源氏<sup>ゲンジ</sup>代々<sup>トクトク</sup>居<sup>ゐ</sup>り<sup>ま</sup>す<sup>地</sup>の<sup>ち</sup>も<sup>り</sup>賦<sup>ヒツ</sup>して曰<sup>い</sup>  
和名抄<sup>ワナヒナガサ</sup>鎌倉<sup>カマクラ</sup>郡<sup>ノ</sup>かまくら<sup>ノ</sup>郷<sup>ノ</sup>なり<sup>一</sup>カマクラ<sup>ハ</sup>  
たき<sup>タ</sup>くら<sup>カ</sup>まくら<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>の<sup>こゝ</sup>に<sup>さ</sup>き<sup>ま</sup>す<sup>と</sup>な<sup>い</sup>く<sup>こゝ</sup>に<sup>ハ</sup>ワ<sup>ヤ</sup>あり<sup>む</sup>

旧記曰鎌足と<sup>ハ</sup>常陸<sup>トクシマ</sup>玉麻<sup>タマカ</sup>郡<sup>ノ</sup>の<sup>人</sup>也<sup>ナリ</sup>推古<sup>トシホ</sup>天皇<sup>ノ</sup>二十三年<sup>ニ</sup>甲戌<sup>ノ</sup>誕生  
大中<sup>ナカノ</sup>氏<sup>ノ</sup>なり<sup>お</sup>と<sup>お</sup>ね<sup>お</sup>ね<sup>お</sup>に<sup>よ</sup>り<sup>て</sup>麻<sup>カ</sup>倉<sup>ノ</sup>系<sup>ノ</sup>信<sup>ノ</sup>の<sup>所</sup>相模<sup>ノ</sup>の<sup>所</sup>  
由<sup>ヨ</sup>井<sup>ノ</sup>郷<sup>ノ</sup>なり<sup>や</sup>と<sup>る</sup>ひ<sup>ら</sup>る<sup>水</sup>を<sup>感</sup>へ<sup>り</sup>奉<sup>ホ</sup>来<sup>キ</sup>石<sup>イシ</sup>お<sup>お</sup>ひ<sup>ら</sup>る<sup>鎌</sup>を  
今<sup>イマ</sup>の大<sup>オホ</sup>系<sup>ノ</sup>の<sup>松</sup>丘<sup>ノ</sup>に<sup>埋</sup>り<sup>し</sup>り<sup>か</sup>まくら<sup>ノ</sup>郡<sup>ト</sup>い<sup>ふ</sup>と<sup>也</sup>  
藤<sup>フジ</sup>左<sup>サ</sup>太郎<sup>ノ</sup>時<sup>トキ</sup>忠<sup>ノ</sup>ハ<sup>聖</sup>武<sup>ノ</sup>帝<sup>ノ</sup>の<sup>御</sup>宇<sup>ニ</sup>ア<sup>ハ</sup>八<sup>ハチ</sup>幡<sup>ハチマタ</sup>惣<sup>サウ</sup>退<sup>タイ</sup>補<sup>ポ</sup>使<sup>シ</sup>大<sup>ダイ</sup>職<sup>シヨク</sup>冠<sup>クワン</sup>鎌<sup>カマ</sup>子<sup>シ</sup>大<sup>ダイ</sup>  
氏<sup>ノ</sup>の<sup>孫</sup>孫<sup>ノ</sup>時<sup>トキ</sup>忠<sup>ノ</sup>鎌<sup>カマ</sup>倉<sup>ノ</sup>に<sup>住</sup>し<sup>且</sup>後<sup>ノ</sup>平<sup>ヘイ</sup>将<sup>ショウ</sup>軍<sup>クワン</sup>貞<sup>サダ</sup>盛<sup>セイ</sup>の<sup>嫡</sup>孫<sup>ノ</sup>上<sup>ノ</sup>總<sup>サウ</sup>介<sup>ノ</sup>直<sup>チキ</sup>方<sup>ノ</sup>に<sup>住</sup>す<sup>康</sup>平<sup>ノ</sup>六<sup>ノ</sup>年<sup>ニ</sup>源<sup>ゲン</sup>頼<sup>レイ</sup>義<sup>ギ</sup>家<sup>ノ</sup>源<sup>ゲン</sup>圍<sup>ノ</sup>八<sup>ハチ</sup>幡<sup>ハチマタ</sup>官<sup>ノ</sup>を<sup>建</sup>立<sup>ス</sup>す<sup>け</sup>比<sup>ヒ</sup>より<sup>源</sup>氏<sup>ノ</sup>代<sup>ノ</sup>の<sup>居</sup>住<sup>ル</sup>の<sup>地</sup>と<sup>なり</sup>源<sup>ゲン</sup>氏<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>流<sup>ノ</sup>と<sup>なり</sup>く<sup>り</sup>

三代<sup>ノ</sup>将<sup>ショウ</sup>軍<sup>クワン</sup>九<sup>ク</sup>代<sup>ノ</sup>乃<sup>ハ</sup>執<sup>シツ</sup>權<sup>クワン</sup>春<sup>ノ</sup>の<sup>花</sup>咲<sup>キ</sup>け<sup>ハ</sup>秋<sup>ノ</sup>の<sup>紅</sup>系<sup>ノ</sup>と<sup>な</sup>す<sup>柳</sup>の<sup>都</sup>も<sup>ろ</sup>こ<sup>ノ</sup>里<sup>ノ</sup>  
高<sup>タカ</sup>時<sup>トキ</sup>致<sup>チキ</sup>は<sup>其</sup>祖<sup>ノ</sup>肥<sup>ヒ</sup>前<sup>ノ</sup>守<sup>ノ</sup>平<sup>ノ</sup>維<sup>イ</sup>時<sup>トキ</sup>より<sup>出</sup>て<sup>其</sup>孫<sup>ノ</sup>左<sup>サ</sup>乃<sup>ノ</sup>依<sup>イ</sup>直<sup>チキ</sup>方<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>四<sup>シ</sup>郎<sup>ノ</sup>を<sup>夫</sup>  
幼<sup>コウ</sup>詩<sup>シ</sup>之<sup>ノ</sup>實<sup>ノ</sup>在<sup>ニ</sup>か<sup>ま</sup>く<sup>ら</sup>に<sup>立</sup>て<sup>民</sup>の<sup>心</sup>を<sup>燃</sup>や<sup>し</sup>め<sup>り</sup>  
三代<sup>ノ</sup>将<sup>ショウ</sup>軍<sup>クワン</sup>ハ<sup>清</sup>和<sup>ノ</sup>天<sup>テン</sup>皇<sup>ノ</sup>十<sup>ジウ</sup>代<sup>ノ</sup>左<sup>サ</sup>馬<sup>バ</sup>頭<sup>ノ</sup>義<sup>ギ</sup>家<sup>ノ</sup>三<sup>サン</sup>男<sup>ノ</sup>正<sup>セイ</sup>二<sup>ニ</sup>位<sup>ノ</sup>持<sup>チ</sup>大<sup>ダイ</sup>納<sup>ノ</sup>言<sup>ノ</sup>頼<sup>レイ</sup>朝<sup>ノ</sup>頼<sup>レイ</sup>家<sup>ノ</sup>  
實<sup>マコト</sup>朝<sup>ノ</sup>三<sup>サン</sup>代<sup>ノ</sup>征<sup>テイ</sup>夷<sup>ノ</sup>大<sup>ダイ</sup>将<sup>ショウ</sup>軍<sup>クワン</sup>に<sup>任</sup>九<sup>ク</sup>代<sup>ノ</sup>北<sup>キタ</sup>条<sup>ノ</sup>時<sup>トキ</sup>致<sup>チキ</sup>より<sup>高</sup>時<sup>トキ</sup>入<sup>ノ</sup>道<sup>ノ</sup>に<sup>至</sup>り<sup>て</sup>亡<sup>シ</sup>ふ  
時<sup>トキ</sup>致<sup>チキ</sup>ハ<sup>其</sup>祖<sup>ノ</sup>肥<sup>ヒ</sup>前<sup>ノ</sup>守<sup>ノ</sup>平<sup>ノ</sup>維<sup>イ</sup>時<sup>トキ</sup>より<sup>出</sup>て<sup>其</sup>孫<sup>ノ</sup>左<sup>サ</sup>乃<sup>ノ</sup>依<sup>イ</sup>直<sup>チキ</sup>方<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>四<sup>シ</sup>郎<sup>ノ</sup>を<sup>夫</sup>  
附<sup>ツケ</sup>家<sup>ノ</sup>其<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>也<sup>ナリ</sup>今<sup>イマ</sup>附<sup>ツケ</sup>系<sup>ノ</sup>次<sup>ノ</sup>男<sup>ノ</sup>四<sup>シ</sup>郎<sup>ノ</sup>附<sup>ツケ</sup>致<sup>チキ</sup>頼<sup>レイ</sup>朝<sup>ノ</sup>に<sup>在</sup>世<sup>ニ</sup>ハ<sup>附</sup>致<sup>チキ</sup>受<sup>ウケ</sup>領<sup>ノ</sup>乃



世沙汰なり四郎よてさし置れり居覺去の後正治二年二月遠江守に任

源平慶長記 十八

頼朝運七東海よりひききつて天下を手にしむるの靈をたけり乃  
詔相志しなむ八幡大菩薩の四利生る都のなるるのいふやすし大  
菩薩を幼侍しむる一として高宮を造営して靈神をいふひむる社禮こそ  
をちりめえりてはひききこをいりへり朱の玉垣をきりみよりの松風軒  
すさみ祭礼四時におこし神女日おほ再ぬせり

宗長代

文系の子め六年六月の末駿河より一歩をすめ足柄山を越して不二  
の根をやめて伊豆の海神の小島より浪のこゆるきの破をつひ鎌倉を  
一見せしは右大將家のそのころ又九代の榮もく眼の心の心地してつ  
ひの松雪の下の薨る実よ石清水よ立まきんんとそおけ侍りゆくの  
たすまひ谷くのくまきいりまの海の底もえをつひまよ八九年のひ  
か山の内庭の谷の鈴柵のりつてきて凡八九玉二ころよ分れてたゆへも  
たやすかひとつひこころかきつてあてむさし世をさして下界

とてさるる路の丘辺の柳系青みよりふまのまに 平泰時

鎌倉志は柳系ハ八幡宮舞殿の辺より東薬師堂あ近をいふむ

柳多かりしときかまうを柳の都といふ

鴨長明は法東紀にいふ  
作相模も鎌倉郡ハ下界のろくやをん天朝の築温而之武將の林を  
す万葉の花方よひひけ勇士のたよまより百歩の柳百とい中り弓を  
月よ似る一張をはとちて胸をさす一飯ら秋の霜の如く之天よんて  
胸すし一不界

江之崎ハ三韓賊天三浦三崎は杜戸の明神あり合ふ系と相模入道大の  
地由井・淡々下河辺の庄司の笠掛を射初る小袋坂稻村の奇七里・淡月  
かけ谷の替をつり扇の谷のハ佐弁の紋の畔の腰越の寺ハ赤慶のヤ状  
の下書を跡し一鯉の淵ハ志る菊の最後を歌をさむ

相州江の崎年支天の杖葉三韓支天のひよりなり源記什物なむ  
ハ鎌倉志よあり

三浦郡三崎郷ハ相州の奇豆別房筋のりるよ西列の奇は對江







寺は宛ある多ハ往古々出あするのみならず、また奈良の薬師寺つゝ  
一の観音寺下町の薬師寺より日かニテ不の戒壇なり、一年又一万こゝ人  
元大政官の度牒を以てニテあつて受戒ゆるするものよつて出あの心  
きあつての寺又入て宛して文字する也度牒を以てする者出あを由り  
され傳教弘法の有様出あ遠くハ寺又入て文字あり由あつて  
度牒を以てするハ受戒ゆるなり

出あさんとあつて末坐の順の舞 友仙  
才四 大兒より才小ちど 才一 才一 才一 才一 才一 才一 才一 才一 才一 才一

に瀬川ハ宗尊親王の影をうつし、瀧川ハ青砥ハ錢を披す日蓮盛久ハ  
首の坐景清かつて、條の跡大塔のまゝ、條の跡ハ錢を披す日蓮盛久ハ  
為又誠せし勝長壽院ハ、又、條の跡大塔のまゝ、條の跡ハ錢を披す日蓮盛久ハ  
をきつ

中務官宗盛ハ、信りハ後、義我院の皇子よてかまつての將軍より  
おつて、信りハ後、義我院の皇子よてかまつての將軍より  
信りハ後、義我院の皇子よてかまつての將軍より

ていふの

文永元年宗盛親王十宗財宗と傳あてかまつて中相とあつて、依り  
將軍は女房のこゝよめ、信りハ後、義我院の皇子よてかまつての將軍より

書抵書あつて、信りハ後、義我院の皇子よてかまつての將軍より  
信りハ後、義我院の皇子よてかまつての將軍より

日蓮ハ首の坐 龍ハ首の坐 龍ハ首の坐 龍ハ首の坐 龍ハ首の坐 龍ハ首の坐 龍ハ首の坐 龍ハ首の坐 龍ハ首の坐 龍ハ首の坐  
盛久ハ平家の侍至馬判を以て、詔曲ハ清水親音利生のみあり  
景清ハ、平家の侍也、其、信りハ後、義我院の皇子よてかまつての將軍より

景清ハ、平家の侍也、其、信りハ後、義我院の皇子よてかまつての將軍より  
出の討別當公曉、女ハ、信りハ後、義我院の皇子よてかまつての將軍より



















年癸丑七月二十日賜公牒一通以爲相復其本邑爲相後任録倉

早藤ヶ谷荒草藤ヶ谷丘墳墓猶存ス

鴨長明海通化 鴨社氏人菊太夫長明入通法名蓮弘

白紙の海り中山の藤宗素出栖の佐士あり性急は底よりいひ

ひらひ藤宗といふはあまのついで運をたより居るいひむら

合をたつてそとみをかきあつてあつては貧泉の根莫き

りて多し藤よよせ力かき音をのりかきむらゝ宮野谷の埋よ

意樹花とて惜しぬ命乃きいひおれは投野の園と胸の底よ海

皇衛々大政入通清盛末男本三位中將須テの我よいけりて録

倉よおむむりし藤宗化よあり

俊基 右の辨 元徳二年五月後醍醐帝出むるのまゝ

冥東の百傳とてありけりの日記あり記行あり

ついで草

かまづの海よあつてといふまは彼さふひまらきまのまは

よてなれもあつてまもあつてのあつてのあつていひ魚おのり

かまづの海よあつてといふまは彼さふひまらきまのまは

よてなれもあつてまもあつてのあつてのあつていひ魚おのり

かまづの海よあつてといふまは彼さふひまらきまのまは

よてなれもあつてまもあつてのあつてのあつていひ魚おのり

かまづの海よあつてといふまは彼さふひまらきまのまは

よてなれもあつてまもあつてのあつてのあつていひ魚おのり











かまろつとをよして せりんとつね魚 存

苔磨砂海老軍胡すて魚蟹の類あまかつきいふあはれを御お  
 一おつりかよつぬ日あ一者め一の地産々武相の境々一して六備令伝々む  
 さの地なる濃戸の町神々四橋一覽の眼をさき能見堂よりハ景源  
 の詩をるる照るのね字於ね令伝文庫とつより祿名寺よりて今々  
 文珠像普賢像黒梅西湖梅青ま乃お葉ま乃に西湖さうらの二梅と  
 太きまもの頼朝乃わくをよたつ一廣きあらかま乃乃海通よ此今  
 いす一の枝本町といひ大坂の宿々花女町乃海流よりさか東南は  
 わま山つるわく境地狭く一てまたなな乃号ありむけの蟹花蟹ま  
 んむハ何そ今乃の泰平不易乃江戸よりんぬ

魚蟹のちるまつり 山家集

串よさし物とあまかりしを何と何とあつとて作  
 かつしつとてきつて  
 あまかりし物とあまかりしを何と何とあつとて作  
 いせのせつとあまかりしを何と何とあつとて作

ちるまむせいのちつふんあ出ていそき巻のけさるる  
 巻人のいそき巻のけさるる

あみ稚魚を練て斗て買ふ人々  
 買ふもて

たり耐学螺 寶曆六年板 三吉山人草也撰

三吉志 左 願 奉 螺

右天將頼朝公三吉遊覧の耐

土肥治郎寶年令てまの

奉螺を海に放てむ實平なる

向てをも取せむ左り耐の茶

螺といふよつては人實平貝

あり独奉螺は是なり投せし物

ありては世人あやうてたり

巻の巻螺は社戸は喜んて

浅黄  
 可也

























後辨へと皇后御相嘗者の高あふ火をかかへりて二おむらの人の  
もろ金剛力士の二階門の中、天神の社七十二箇の由、亦二十八箇、  
藏王堂一肘のくまうとくまう、大平元又えきう、まよふ、のる、  
右開の附諸堂もく、藏神すも、  
六月七日 藏王堂 藏神すも 堂あまをきを行ふ  
先達の後人二人堂の傳はる、法花方せん法方の両院立合行法、  
傳あまうて、藏後の者急、  
余うて神あのおと、  
聖り、

藏王堂

是足ら花の塵、  
吉野令式 解死、  
毎年三月一日花供養、  
會式、  
る、

立合、  
在あ、  
上市、  
藏、

さ、  
下市、  
上市、  
あ、

ち、  
雲、  
は、  
ち、







乳嬰顔よかきハナラウ其々朱楊と伊波をくちて製するを海舟とせり

古事記傳

湯津津間櫛之男性一箇取闕而燭一火入見之時又次よよつ  
志こめの遊来一附也覺了さくちる由つはまなくを引かきそなけりて  
たきくハ年ちなきこもめきけむる跡いつてすき

清見系の天皇々玉栖人の形はかく後醍醐帝々吉水院を皇居す  
定むすつ好まは院はやくり秀吉もは寺を在陳とけ

清見系の天皇吉成々玉栖人藏させぬ主の飛船の船を内調  
備へは信州の跡を至よ下されし川はそちけ居代に出ぬ  
魚いそちる人々念してそちけ居代は其まきいさかつぬ船をくはせし  
出させぬ人々是を玉栖のくちかきつりてや彼ぬを玉栖の橋止  
伊せりれ今よまきく也も後めくもつり

孝立正月元日玉栖笛玉栖奏すや神ありあつ相并風風のぬ衣を  
ぬきてあつやあきそ玉栖ははは声しそをさへ下り笛を吹くも  
なつけぬあつて立神具外ぬくもや

書紀神武卷

更少進而有尾而披般石出者天皇問之曰汝何人對曰  
臣是磐梯別之子此則吉野之國標部之始祖也

すや川は海を玉栖村七村ありすて玉栖は時いつたり

おもひ記

きやゆ玉栖も大將の命の仰せし由をえりてひけり  
ほむこの日のあまおほききはせむた刀もつてあまあま

のれかつかたあまのさやこや  
又きやゆ白檜上は横白をつり其横白は大山酒をかきつり  
みきちちりあまなつてひけり

か一のあは横白をつりよよまか大山酒をきこしをせまらあま  
は歌は玉栖もの大賛奉り時常今つてあまあま

建武のみみれは後醍醐帝京都より行きてあま行宮へい  
よよのあま

花のあまよよきやゆよよ水り穂のりよあけ





















桜ハ全畫の  
似城也

三月晴高風子  
おひら

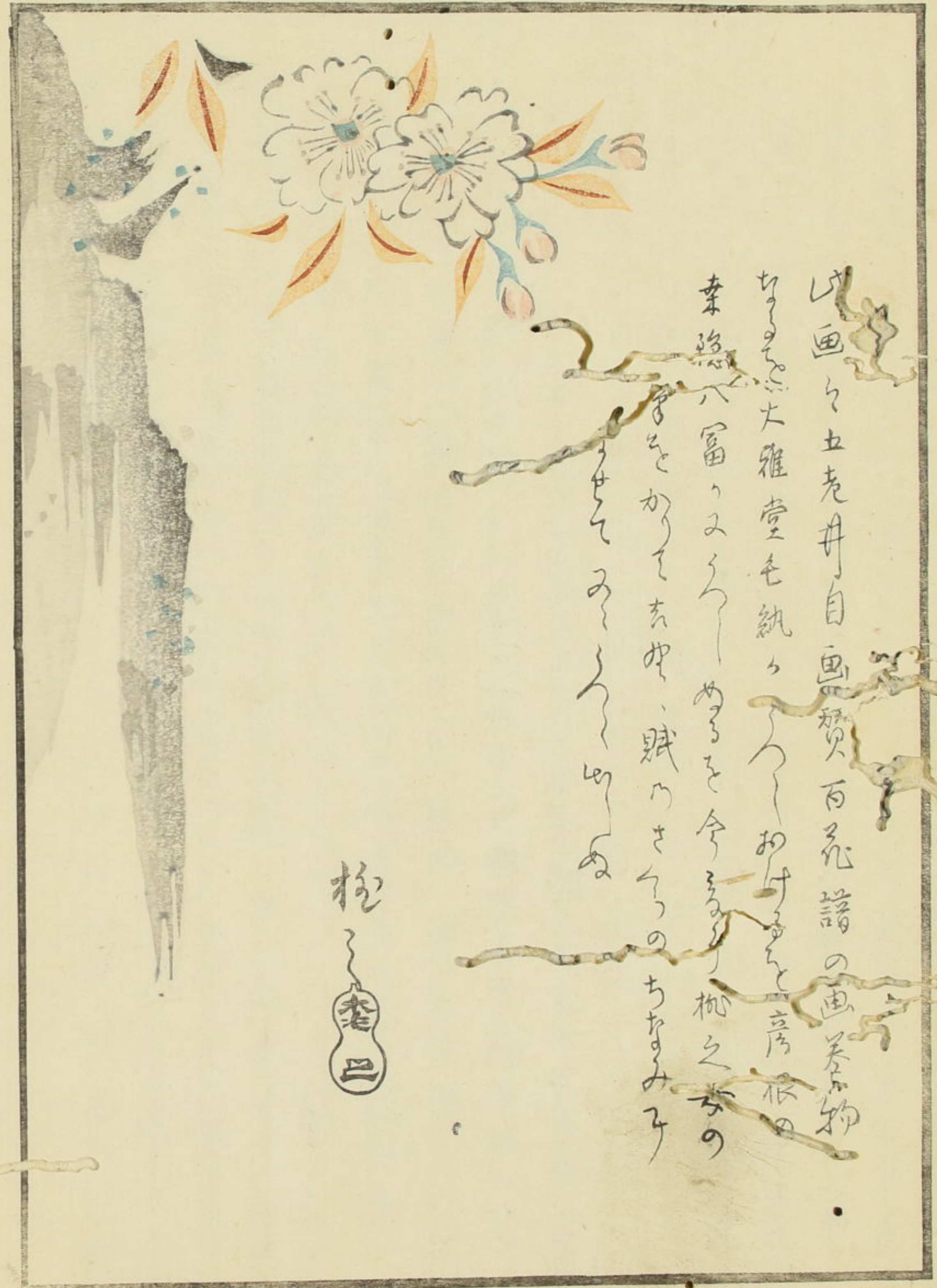
風俗

り末  
の

の

の  
の

111



此画ハ五老井自画賛百花譜の画巻物  
の  
大雅堂毛紙  
の  
六富、又、  
の  
賦のさうの  
ちのみ子

柳  
三









芳野山是花

京都春是花

何処山と水

乾坤曾是花

定まらば淋しい物にさきつたをなす詩か

花入るとまじり車かつらさくはむめて花をゆりて

みよやういふまじり花をゆりてかきかへん

考ふまじり花をゆりて花の日遊はあまの泉

ははらばら花をゆりて花のあけの道

まよふまじり花をゆりて花のあけの道

まよふまじり花をゆりて花のあけの道

雪や木栖の鳥の 笛のやま

雪の野のよみわらふ鳥のさくさく

雪のまじり花をゆりて 花の雪

花よりまじり花をゆりて 花の雪

さやうらら 月かきり 花の枝

水中花の浪さくさく 牛車

貞室 西行 利休 守氏 宗鑑 貞徳

三よみわらうまじり花見らま

花も実もあまやわらうのまじり花

のむ酒を花をゆりて 花の雪

うつらあま花や美人乃花をゆり

花のまじり花をゆりて 花の雪

花をゆりて 酒のあま花の上をゆり

花をゆりて 一見せむや 花の雪

花をゆりて 花をゆりて 花の雪

花をゆりて 花をゆりて 花の雪

花をゆりて 花をゆりて 花の雪

花をゆりて 花をゆりて 花の雪

花をゆりて 花をゆりて 花の雪

花をゆりて 花をゆりて 花の雪

花をゆりて 花をゆりて 花の雪

花をゆりて 花をゆりて 花の雪

花をゆりて 花をゆりて 花の雪

乾坤無住 円行二人



昔のうさぎさくさくを  
 花さかりのひかりの  
 大孝や さくさくの  
 花さかりのひかりの  
 唐の花流れて来るや  
 西行の  
 花さかりのひかりの

夕空  
 鬼了  
 鳥足  
 嵐雪

祈年祭の祝詞  
 初穂 奉置 懸閉 高知 懸腹 満  
 双氏 けいも 類ま 酒を けいも







寒 芦 風

長 慶

難波風入江より音きて草の枯るのかけきき

三好修理亮義輝公執権

旅 宿 霰

宗 養

風ませにあきたるる笹枕るるむすりぬ旅宿のひき

宗叔男連歌師

関 雪

政 宗

さゆも誰か裁く人連歌乃せまの戸うつむおすり

美濃守伊達氏

梅 香 留 袖

兼 与

誰袖も匂ひをふれて衣のこす色も可く草履の枝枝

猪名代氏連歌師

遠 村

玄 陳

遠くは夕つけきの声もあつて里もやうと

里村氏玄仍る京任連歌師

待 花

昌 俊

芳野の花待とるのねもく

佐川田永井家老武功善宗鑑同村人

山家初々

尚 澄

山わけ乃ねるのりうあまう 時雨一そよみはあまう

駿品惣社官

月 思 往 事

長 嘯

世くのく月もさあかみもあもくめう袖が

美濃守従四位右将若狭守勝俊秀吉公甥

関 月

宗 祇

きよみくしつゆやぬせきつ戸ハ初う申せハ月の中

能品人飯尾氏常縁和歌を甲乙別古今集を傳入連歌

中真也号自然齋種玉庵文亀二年二月廿九日卒八十二歳

遺骨ハ駿品強東郡柘園定勝寺あり

月 前 述 懐

心 坂























陸奥ちり縮圖

一板々首達の海

雲々意日月々々々々々々々々々々

水我



水

芭蕉

ゆき

又

禪の



松都

陸奥

椿

修

人

其

唐

川

會

水寫











松崎や鶴の身を切りてあはれなるは 万長  
幸ハとて受て御ありんとしてい御もよひ旧をそりていつ時素堂松  
崎の詩あり来未過つてら後々の和歌をわらうる感をもよほす  
ひのちらひ且移風尚もよふありあり  
上日瑞雲寺の諸當寺三十二世の心かき御平向う御入る  
入唐御舟の辰<sup>イラカ</sup>山と御其後雲居禪師の徳也いりて七堂堂  
ありこころの念<sup>イラカ</sup>在<sup>イラカ</sup>先をわらへ一佛上殿能り大伽藍なるあり  
りるの尺佛の尊のいつてやとあつて

念佛のつて

松崎やみまの松を撫樂乃智水の回一法のものく雲居禪師  
むつら  
松崎浦崎より松を撫樂乃智水の通すらる浮崎御田の御ありありの  
けいづれもなつてききり諸の松を古社のゆありあり松電古社御神  
一社より御雲居禪師の御又文治三年和泉三郎奇進あり  
苑形と輪塔の御一藤又文治三年和泉三郎奇進あり

法樂 松崎のつて

松崎のつて松を撫樂乃智水の回一法のものく雲居禪師  
むつら  
松崎浦崎より松を撫樂乃智水の通すらる浮崎御田の御ありありの  
けいづれもなつてききり諸の松を古社のゆありあり松電古社御神  
一社より御雲居禪師の御又文治三年和泉三郎奇進あり  
苑形と輪塔の御一藤又文治三年和泉三郎奇進あり



風物文選大註解卷之貳上終

拜甘藏板

海へりてはちのちの西行行かしのねをまきし樹今ありはま

言ふ心 言ふ山 大伴もけりし 松崎 雄崎 其外の島く浦く浦の

下へりてはちのちの松のけき 詠は 後へり 松崎を 舟へりて

大伴もけりし 松崎 雄崎 其外の島く浦く浦の

言ふ心 言ふ山 大伴もけりし 松崎 雄崎 其外の島く浦く浦の

下へりてはちのちの松のけき 詠は 後へり 松崎を 舟へりて

大伴もけりし 松崎 雄崎 其外の島く浦く浦の

言ふ心 言ふ山 大伴もけりし 松崎 雄崎 其外の島く浦く浦の



